インスタレーション「こもれいろ」
―石橋文化センターでの実践―

米　村　太　一

Installation “KOMOREIRO”: Exhibition Report at Ishibashi Cultural Center

Taichi YONEMURA

要　　旨

筆者は2017年に、石橋文化センターで開催された「アーティストを志す大学生等の創作活動支援プロジェクト」に参加した。「アーティストを志す大学生等の創作活動支援プロジェクト」は、創作活動の場の提供、成果の展示、成果の広報、公開制作、創作活動の場での交流を目的とした、久留米文化振興会と久留米市が運営するプロジェクトである。本論は、筆者が、プロジェクト参加中に制作したインスタレーション作品「こもれいろ」に関する一連の活動を辿り、報告するものである。

１．はじめに

「アーティストを志す大学生等の創作活動支援プロジェクト」（以降「創作活動支援プロジェクト」）とは、石橋文化センター[1]を管理する公益財団法人久留米文化振興会と、久留米市市民文化部文化振興課が共同で運営するプロジェクトである。「創作活動支援プロジェクト」は、石橋文化センターをひとつのミュージアムとして捉えるという、久留米市美術館の基本方針と関連し、次の３つを柱としている。

①福岡県内及び福岡県近郊の美術系大学生等の若手アーティストに、石橋文化センター園内を創作活動の場として提供する。
②創作活動を通じて、美術系学生を支援し、活動を活性化させ、石橋文化センターが創作活動の拠点となることを目指す。
③石橋文化センターの魅力向上と、市民の芸術への理解を深め、関心を高める。

参加団体は、石橋文化センター園内での実地調査や、園内スタッフとの打ち合わせを繰り返し行いなが

佐賀大学芸術地域デザイン学部　芸術表現コース
Course of Art, Faculty of Art & Regional Design, Saga University
[1] 福岡県久留米市野中町にある複合文化施設。久留米市美術館をはじめ、音楽ホールや図書館を備えている。

ら、屋外での展示に向けた作品の制作を行う。制作した作品は、同じく久留米文化振興会と久留米市が運営する「石橋文化センターアート・フェスティバル[2]」の会期中に一般公開する。

筆者は、他に佐賀大学芸術地域デザイン学部芸術表現コース西洋画専攻に在籍する学生11名、卒業生１名を佐賀大学メンバーとし、総勢13名で「創作活動支援プロジェクト」に参加した。普段は平面作品を制作し、専ら屋内での展示を主としている佐賀大学メンバーにとって、本プロジェクトは未知の活動だが、馴染みのある画材とは異なる素材や展示空間に触れ、良い意味で翻弄されることで見識が広がり、佐賀大学メンバーそれぞれの今後の創作活動の糧になることを期待してプロジェクトに参加することにした。

２．作品概要

はじめて石橋文化センターを訪れた時、周囲に溢れるたくさんの自然に魅せられた。樹木や草花は、施設の奥にある坂本繁二郎旧アトリエ（図２：Ｄ）まで美しく茂っていた。しかし、最も奥にある坂本繁二郎旧アトリエまで散策する利用者は少ないという。そこで石橋文化センター内の自然を生かし、なおかつ園内の導線となる場所に作品を設置することで、よりたくさんの観覧者を園内に引き込むことを目指した。

図１：坂本繁二郎旧アトリエまでの通路。
左（東側）に丘、右（西側）に並木という立地。

憩いの森に隣接する丘に沿って、坂本繁二郎旧アトリエまでの導線となる通路が設けられている（図１）（図２：Ｇ）。道幅は約３m、全長約25m の細長い道だが、利用者も園内スタッフも通る通路である。その通路には並木の木もれ日が落ちていた。それはまるで太陽の光と植物と地面が作り出すモノトーンの作品のようで、もしそこに色をつけることができたら、自然との共同制作による作品ができるのではないかと考えた。

「木もれ日」は、英語をはじめ外国語に該当する単語がないと聞く。葉の間から日光が降り注ぐ現象に、わざわざ名前をつけた日本人の、自然に対する美意識を大切にしたいという思いから、「作品と自然が合わさることで、彩りのある木もれ日を生み出す」ということを、作品の基本コンセプトとし、作品の題名を「こもれいろ」とした。

「こもれいろ」を見た人が、何気なく見過ごしがちな木もれ日の美しさを再発見したり、彩られた展示空間でいつもより自然と近づく体験ができたりすることを期待している。

[2] 会期：2017年11月23日（木）～12月24日（日）　開園時間：午前10時～午後８時　会場：石橋文化センター

図２：石橋文化センター園内マップ

http://www.ishibashi-bunka.jp/shisetsu/「石橋文化センターホームページ」掲載画像を編集して作成

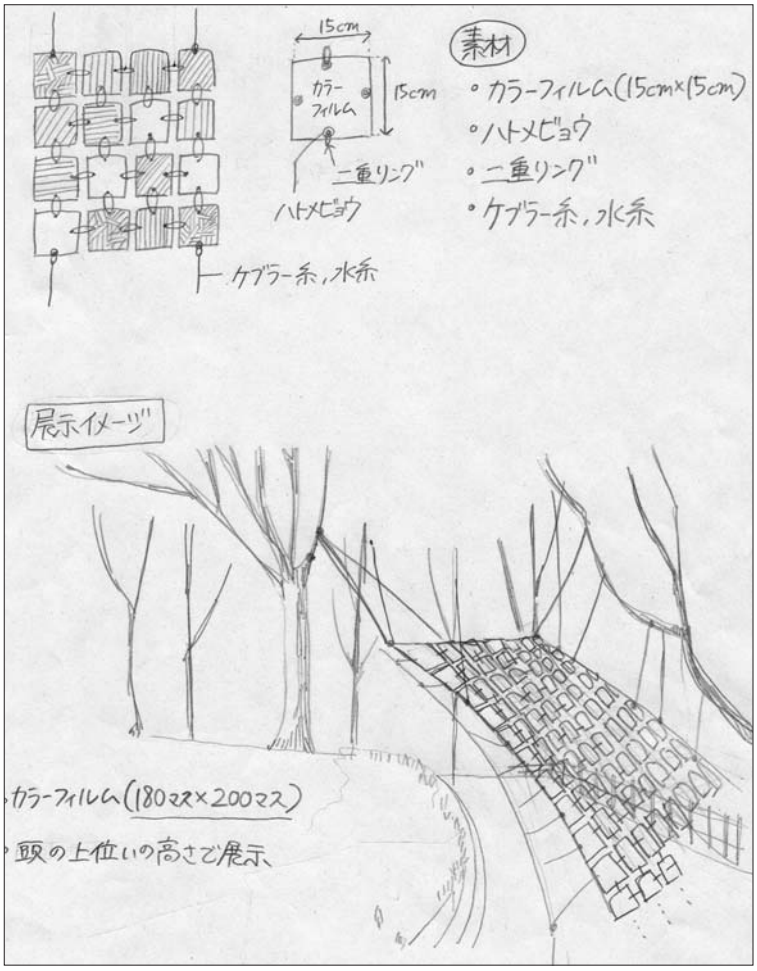

図３：初期のエスキース

３．制作過程

(1) 初期エスキースと仮展示

コンセプトをもとに、「こもれいろ」のエスキースと素材の選定を行った。なお、本作品のエスキースは、仮展示を経てイメージを大きく変更した。最終的なエスキースについては後述するが、使用する主な素材はここで述べるものから概ね変更しなかった。まずは、初期のエスキース（図３）から実験のために行った仮展示までの経過を述べる。

初期エスキースでは、透明度の高い色付きのタイルを連結し、シート状に加工したものを、並木の幹や太い枝に吊るして、頭上に展示するというイメージだった。日光はシートを通り、色がついた光となって通路上に投影され、木もれ日に色がつく。これを「こもれいろ」の基本的な構造とした。木もれ日に色をつける

ためのタイルの素材には、照明機材用のカラーフィルターを用いることにした。素材の候補として、色付きのクリアファイルや下敷きも検討したが、証明機材用のカラーフィルターは、光に色をつけることを前提にしている上、強度、重さの面でも他の候補よりも優れていた。

実際に用意したカラーフィルターには赤、黄、オレンジ、緑、紫、ピンク、水色、紺色の８色があり、サイズは30cm×30cmと、本作品の素材として想定していたよりも大判のものだった。そのため、このカラーフィルターを15cm×15cmになるように４分割し、「こもれいろ」を形作る最小単位のタイルとした（図４）。

タイルの角は、安全面を考慮して丸く切りとり、ハトメ鋲を打った。ハトメ鋲を打ったのは、タイルを連結する部分の強度をあげるためだが、ポリカーボネート製の薄い板という飾り気のない素材に、視覚的なアクセントを加えられると考えたためでもある。
完成したタイルを二重リングで連結し、試作シート（300cm×105cm）を制作した（図５）（図６）。このシートを使って仮展示を行い、実際に初期エスキースに沿った展示が可能かどうかの実験を行った。
仮展示によって明らかになったのは以下の点である。

仮展示での成果と課題

①展示した試作シートの光の透過性は予想以上で、木もれ日に色をつけるには十分だった。
②東の丘から吹く風が強く、展示した作品が大きく揺れるため、タイルの連結部分に負荷がかかり、破損、落下の可能性がある。
③並木の不定形な幹や枝に対し、シートを吊り下げる展示作業が、全てケースバイケースの対応になるため、現実的ではない。
④試作シートを予定の位置に展示をした場合、色つきの木もれ日が、通路上にイメージ通りに投影される時間が短い。

特に、④は、基本コンセプトを通す上で大きな課題となった。通路上に、予定通りの木もれ日が現れるのは正午から15時ごろまでの３時間程度で、太陽が低い午前中は、色付きの木もれ日が西側の並木の中に現れるため発見しづらかった。

図４：加工前のカラーフィルター（左）と加工後のタイル（右）

図５：二重リングによるタイルの連結部分

図６：試作シート（300㎝×105㎝）

⑵　最終エスキース

仮展示での反省を踏まえ、最終エスキースを図７のようにした。大きな変更点は、吊り下げによる空中での展示をメインにするのではなく、東側の側面に対して壁面状に作品を展示することにした点である。吊り下げによる空中での展示は、安全に設置可能な場所に限り、部分的に数カ所展示することにした。なお、壁面状の展示では、単管パイプを支柱として用い、空中での展示では、吊り下げにピアノ線を用いることにした。

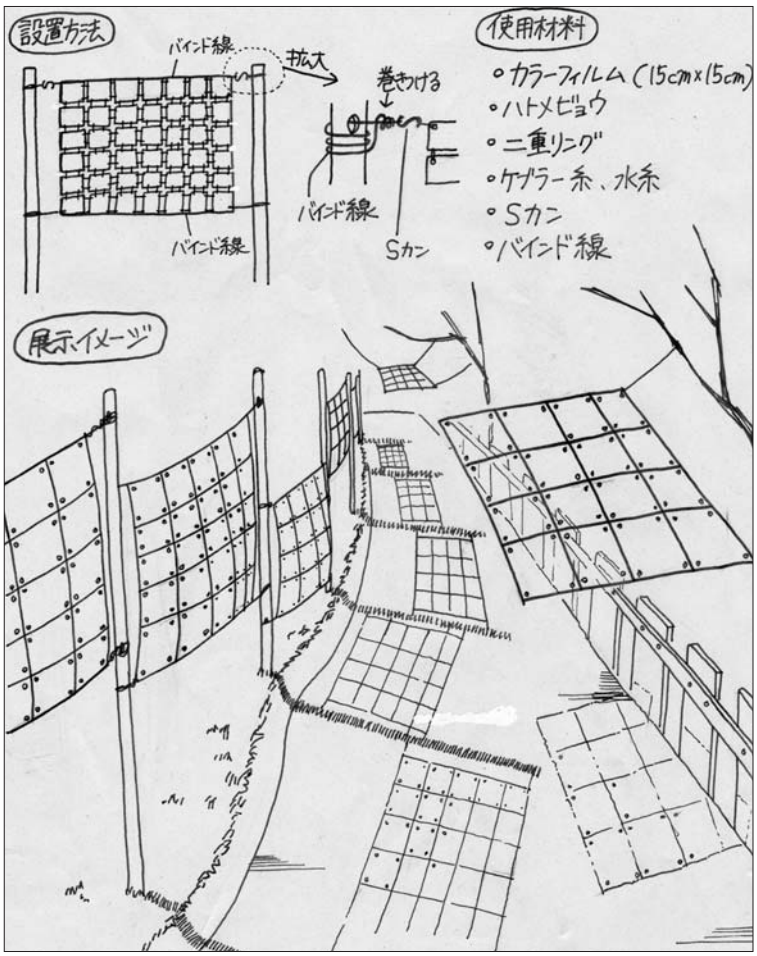

図７：最終エスキース

単管パイプを使うことで、樹木の影に、無機質な直線の影が混ざることが予想された。「こもれいろ」が、木もれ日を扱う作品である以上、木もれ日に余分な要素が入り込んでしまうことは極力避けたかったが、約１ヶ月に及ぶ展示期間と、雨風にさらされる屋外展示における耐久性、パブリックアートとしての安全性、展示作業における精度を考慮し、最も折り合いがつくかたちだと判断した。

最終エスキースでは、壁面状に展示したシートが、午前中に横（東側）からの日差しを受け、また空中での展示を行うシートは、午後に真上から降り注ぐ日差しを受けることで、通路上の木もれ日に色をつけることができるようにした。

夕方から日没にかけて、再び横（西側）からの日差しになるが、西側の並木は層

が厚く、また日暮れに伴って日差しが弱まるため、通路上は影に覆われ、木もれ日は現れない。そのため、西側には作品を展示しないことにした。

「石橋文化センターアート・フェスティバル」の会期中は、夜間に園内のライトアップを行うことになっていたため、「こもれいろ」のライトアップを依頼した。日差しが届かない夜間は、木もれ日によって通路を彩ることができないが、照明機材を使えば、夜間でも通路を彩ることが可能になるためである。しかも、光源の位置や光の向きの設定が容易になるため、日中と違い、並木の幹をカラフルに照らすこともできるのではないかと考え、これを夜間の展示とした。

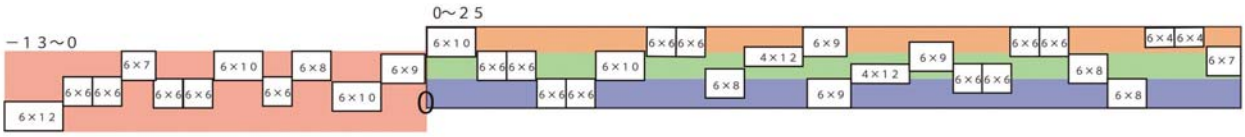

図８：壁面状のシートの展示計画

⑶　制作と展示

エスキースの確定後は、「こもれいろ」の構成部品の大半を占めるタイルの量産に入った。スペアも含め、必要なタイルの枚数は1990枚だった。照明機材用カラーフィルムからタイルを作り、タイルを二重リングで連結するまでの作業を、手作業で行うため、展示に必要な枚数のシートと、スペアのシートが全て揃うまでに２か月かかった（図９）（図10）。

展示作業では、壁面状の展示を支える単管パイプを、地中に約１ｍ打ち込む（図11）ため、単管パイプの詳細な設置位置を決定したり、実際に単管パイプを立てたりする過程で、多くの施設関係者の協力を得た（図12）。設置した単管パイプにシートを展示していく段階で、仮展示と同様に、東の丘から風が強く吹き付けていたが、展示にバインド線を用いることで作品が安定し、シートにかかる負担が軽減できた（図13）。

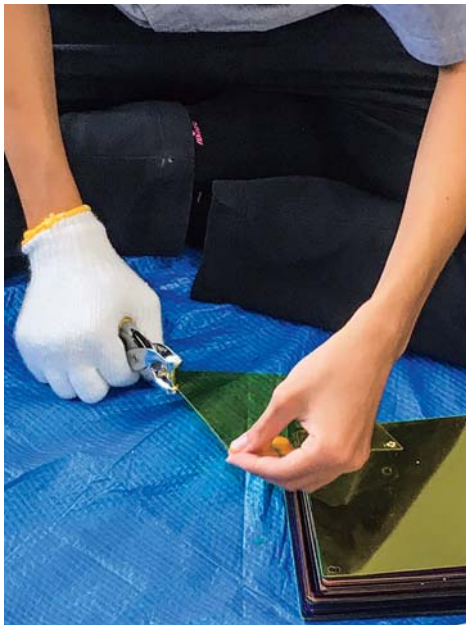

図９：タイル制作中

図10：展示できる状態になったシート

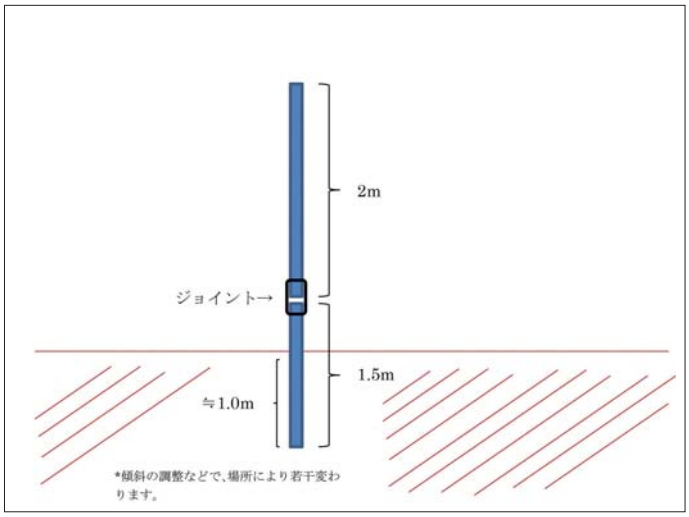

図11：単管パイプ設置計画

図12：単管パイプ設置の様子

図13：バインド線によるシート固定箇所

図14：展示風景

図15：展示風景

図16：展示風景

4．完成作品

(1) 日中の展示

図17：「こもれいろ」
H：2.5　W：3　D：38（m）
石橋文化センター園内

図18

図19

図20

図21

(2) 夜間の展示

図22

図23

図24

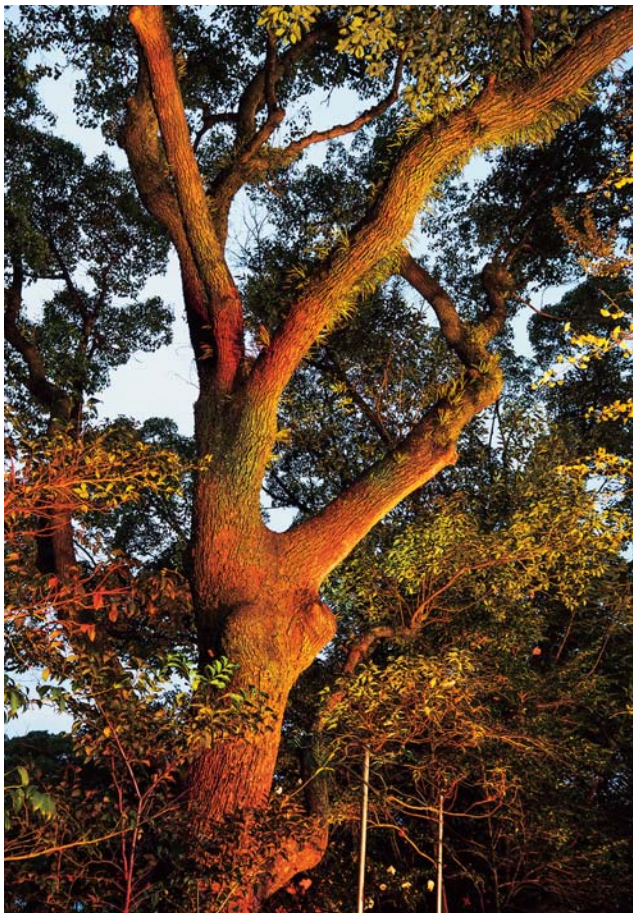

図25

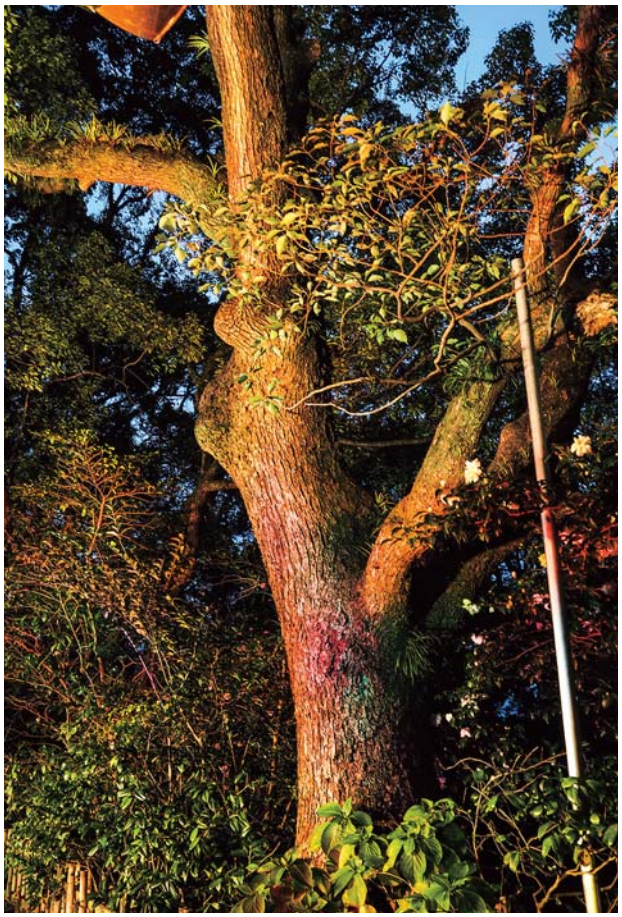

図26

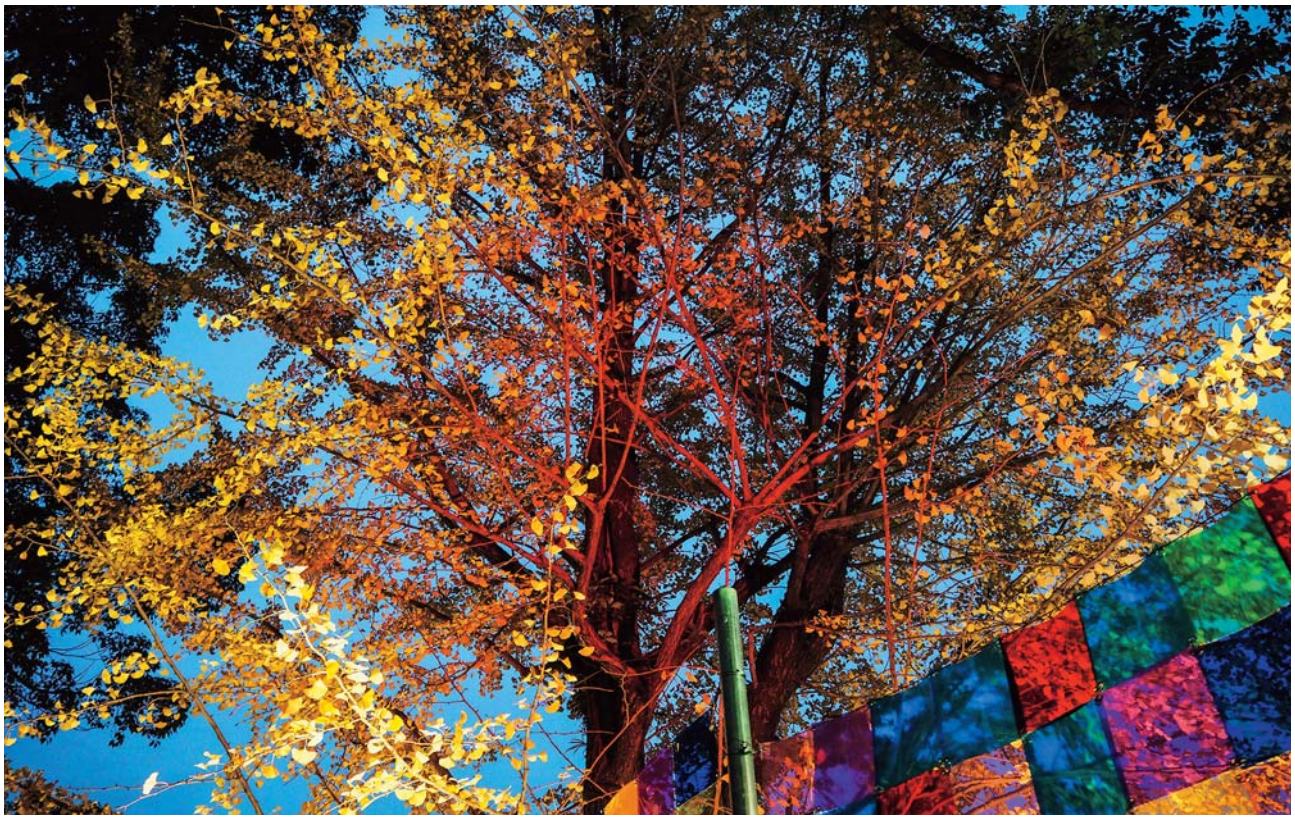

図27

5．おわりに

本展示を通して、「こもれいろ」は、日差しの強さや天候によって印象がやや左右されることはあったが、概ね狙い通り木もれ日に色をつけることができた。園内の散歩に来たという方が、作品の写真を撮りながら通路を通ったり、子どもたちが作品を覗き込んだりする様子が見られた。地面に投影された色を見た子どもの、「虹みたい！」というひと言が印象的で、本体だけでなく、木もれ日に意識を向けることができた手応えがあった。作品には、拙さが目立つ部分もあったが、石橋文化センターの自然に溢れた環境を活かすことができ、また「彩り」を求めた点では、絵画を専門とする参加メンバーのアイデンティティーを大切にすることもできたのではないかと考えている。

はじめは使用を躊躇した単管パイプだったが、想像以上に観覧者が作品に近づいたり、手を触れたりする場面が見られたため、結果的に頑丈な単管パイプを支柱にしたことは、安全性を維持する上で正解だった。また、ピアノ線で空中に展示したシートは、一見すると浮遊しているように見えたため、見た人に不思議な印象を与え、観覧者の関心を惹きつける上で効果的だった。夜間の展示では、光の色味が広範囲に投影され、暗闇でよく映えた。日中は木陰になっていた周囲の樹木が、夜は下から照明を受けて色づいており、１つの作品でありながら、昼と夜とで２つの姿を表すことができた。

作品の制作から展示にかけ、風雨や重力によって様々な想定外の事態が起こった。しかし、ひとつひとつ、事態の解決に向けて奔走した経験は、インスタレーション制作に限らず、参加メンバーそれぞれの作品制作において、試行錯誤が必要になったときに生きてくるだろう。

「こもれいろ」を、今回で終わりにするのではなく、今後も、木もれ日を扱う表現手段として、より見た人を引き込めるかたちに展開していきたい。

参考文献

「平成29年度アーティストを志す大学生等の創作活動支援プロジェクト実施要項」公益財団法人久留米文化振興会、2017年。

参考 URL

石橋文化センターホームページ　http://www.ishibashi-bunka.jp/shisetsu/（2017／12／20）